

渋沢栄一と水産業、大日本水産会 との関わりについて

令和3年6月9日

一般社団法人 大日本水産会

「日本の資本主義の父」とも称される渋沢栄一は、現在、NHKの大河ドラマ「青天を衝け」にて主人公として描かれ、令和6年からは一万円札の肖像画にもなることとなっているが、実は、水産業及び大日本水産会と浅からぬ関わりがある。詳細は、次のとおり。

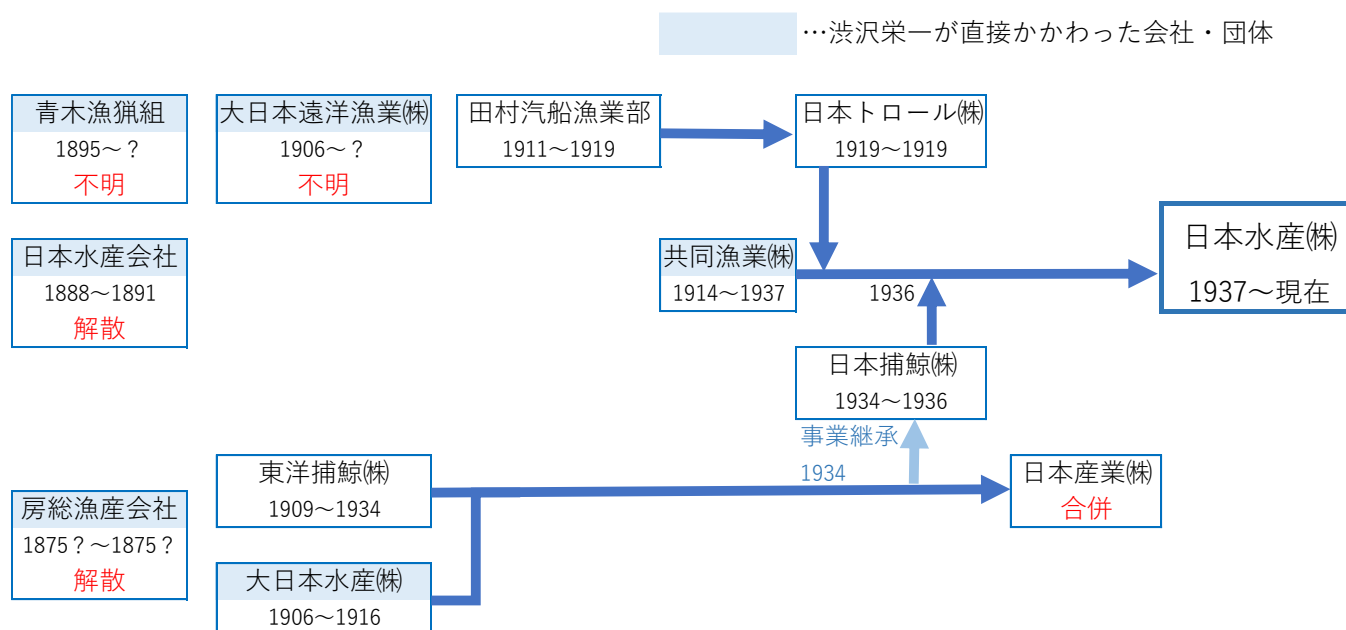
1. 水産会社の設立

渋沢栄一は、500以上の実に多くの会社の設立に携わったが、水産業に関しては、九十九里浜の沖合漁業に着目した房総漁産会社（明治8年）の設立など、多数の水産会社の設立に関与し、その一部は現在の日本水産株式会社（ニッスイ）に至っている。



- ・日本水産会社（明治21～24年、鯨、海草、魚油）
- ・州崎養魚場（栄一の私有、後に会社化、コイ、ボラ、ウナギ）
- ・青木漁獵組（明治27年、北海道にてオットセイ猟）
- ・大日本水産株式会社（明治39年～大正5年、水産物の製造、漁業、鰺の缶詰）
- ・大日本遠洋漁業株式会社（明治40年、オットセイ猟）
- ・共同漁業株式会社（大正3年、現日本水産㈱の前身）

渋沢栄一関連会社名・団体名変遷図（（公財）渋沢栄一記念財団資料）



2. 水産業、大日本水産会との関わり

渋沢栄一は、大日本水産会の終身会員であったが、明治26年4月22日から2日間、三会堂で開催された大日本水産会の第11回大集会において、「水産業の奨励」と題し、水産技術の振興の必要性と、産業としての発展が必要と演説した。

その中で、

(1)「水産事業ハ国利民福ヲ保護スルモノテアル又水産事業ハ広大無辺ノモノテアル、殆ト天工ノ無尽蔵テアル、又水産事業ハ日本ニ於テハ殊ニ注意ヲ厚クセネハナラヌ、日本ノ地ノ利ハ水産事業ニハ最モ適応シテ居ル」と話し、

水産業は、国家、国民の利益につながり、資源が無尽蔵にあり、島国日本の地理的環境から最も適した産業であることから、特に注意を払って振興すべき旨述べた。

(2)「日本ノ水産事業カ今日ニ沿革シテ居ル所ハ矢張農業若クハ工芸ト同一揆ニ出テ居ルヤウニ見エル、(中略)此ノ事業ニ就テ資本ト労力ト相合シテ之ニ加フルニ学問ヲ以テ営利的ノ大組織カナケレハ真ニ奨励發達シテ行クコトハ六ヶ敷カラウ」と話し、

零細な水産業の発展の限界を指摘し、資本と労力、技術を加え営利的な組織にすることで真の発展を遂げられる旨述べた。

(3)「願クハ本会ニ於テハ十分ニ事実ヲ調査シテ資本労力技術ノ三要素テ合セタル営利的ノ組織ヲ奨励スルコトヲ心懸ケタイト存シマス、古人ノ文章ニ「智者ハ事ヲ始メ能者述フ一人ニシテ成ルニアラサルナリ」ト云フ格言カアリマス、(中略)此ノ水産会ハ前ニ言フ所ノ智者トナツテ更ニ他ニ能者ヲ待テ相共ニ此ノ水産業ノ發達ヲ図リ、他日其大成ヲ遂クルヲ得タイト思ヒマス」と話し、

水産業について我が国のおかれた周辺環境等から見たその振興の重要性、零細な水産業の限界とこれに資本、労力、技術を加え営利的組織にすることによる発展の可能性等、現在にも通ずる的確な指摘。

さらに大日本水産会についても、大日本水産会が業界のリーダーシップをとることにより、水産業の発展につながるという指摘など、時代を先取りした名言、至言の数々、まさに水産業界の大先達ともいふべき人物であることが明らかになった。

こうした功績の故をもって、明治26年8月、当時の会頭である彰仁親王殿下より、有功章(現水産功績者表彰)を授与された。

3. 渋沢栄一のプロフィール

1840年(天保11)生まれ、現埼玉県深谷市血洗島の豪農市右衛門の長男。学問、剣法と武家同様の教育を受ける一方、藍玉の製造、販売に長けた。尊皇攘夷に傾倒するも、一橋家(慶喜)に仕え、商才を認められ渡仏。大蔵省、井上馨の下で働いた後、下野して第一銀行頭取。以降500以上の会社、証券取引所、商工会議所、社会福祉施設、学校等を設立。1931年(昭和6)没、享年92歳。銅像は各所に存在。王子飛鳥山の旧宅に資料館がある。孫の敬三は日銀総裁、大蔵大臣ながら、「祭魚洞」(雅号)と称する漁業史研究者としても有名。



常盤橋公園内渋沢栄一像